

# 発話行為が他者にもたらす影響に関する研究

## A Study of the Influence Speech Act Has on the Other

平 田 祐 子

Yuko Hirata

(要約)

日本文化は共有する情報量から鑑みるとハイコンテキスト文化と位置づけられているが、昨今の日本社会はハイコンテキストとローコンテキストが混在している。本稿では、日本人が遭遇する様々なコンテキストの中で想定に近いローコンテキストにおけるスキル修得の手法と語用論における第一義的発話行為に直視して疑似体験を試み、スキル修得の過程とその結果を言及する。

(キーワード)

コンテキスト、発話行為、コミュニケーションスキル

### はじめに

対人コミュニケーションにおけるコンテキストは重要な役割を果たす。コンテキストには多種多様な変化パターンがあり、自国の文化や所属社会の状況によっても異なり、人間同士が共有する時間が長いと疑似体験の回数が多くなるため共通理解が可能となりやすい。そのため、同国民、同地方、同年代、同窓生、友人、家族等は同じコンテキストを共有していることが多いため意思疎通が円滑になりやすいのである。

さて、本稿では、日本人のコンテキストを考察して、日本人にとって難しいコンテキストにおけるスキル修得の取り組み過程を考察する。スキル修得における表現面では語用論の第一義的発話行為の重要性も認識しながら表現に要する時間にも焦点を当て、ローコンテキストにおけるスキル向上のための方法論を考察していく。

### 1. 本研究の目的

若年者のコミュニケーション不足については予てからも警鐘を鳴らされてきたが、平成16年1月29日に厚生労働省が行った「若年層の就職能力に関する実態調査」<sup>1</sup>により事務、営業系の仕事に採用される可能性のなかでコミュニケーション能力修得の重要性が明らかになった。対人関係を円滑に保つためのスキルは、受信 (in-put) の際には「傾聴・観察・情報収集」のスキル、処理の際には「熟考・関連・優先づけ」のスキル、発信 (out-put) の際には「反射・言い換え・共感・質問・確認」のスキル<sup>2</sup>と考へ、拙著 (2004)<sup>3</sup>においてコミュニケーションサイクルとしてスキル構成を立てた。平成16年度より筆者が担当している「言葉とコミュニケーション」の講義演習にも導入しているが、3年経過してフィードバックしてみると、これらのスキル以外にも修得すべきスキルの存在に気付いていたものの実践することが困難なため留保してきたものがある。しかしながら、今年度、初の課外学習として導入することができた。コミュニケーション概念からそれらを抽出して修得過程と結果をまとめることが本研究の目

的である。

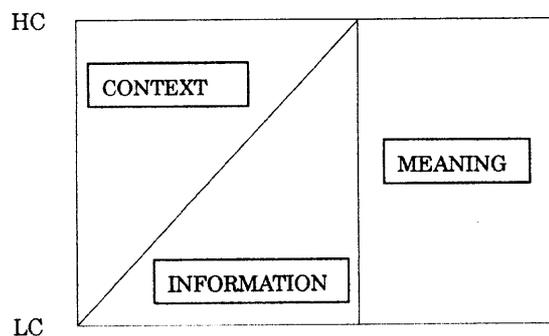
また、ここで問題になるのが「コミュニケーション能力とは何か」ということである。今年度の日本コミュニケーション学会シンポジウムでも問題になっていたが、広範なるコミュニケーションの捉え方によって求められるコンピテンスは変化する。長尾、田中（2006）は言語学分野、コミュニケーション学分野、社会学分野、医療分野、ビジネス分野での様々な概念化が試みられていることを述べている。<sup>4</sup> 本稿では、本学オフィス情報学科の学生に不可欠なコミュニケーション能力をビジネス社会で人間同士が面对する際に必要な能力と考えている。2年後に日本の社会へ送り出す短期大学生を対象としたスキル向上を目的としながら多種多様なシーンで活用できるスキルを修得させるためのひとつの手法を考察する。

## 2. コンテキストの認識

コミュニケーションスキル修得のために必要な条件は混在するが、対人コミュニケーションにおけるスキル修得を問題とする場合には常にコンテキストを考慮しなければならない。コンテキストの認識を明確化することによりスキル向上に拍車がかかり、コミュニケーションを円滑におこなう上でも大きな影響を及ぼすであろう。

### (1) HC（ハイコンテキスト）とLC（ローコンテキスト）

コンテキストはコミュニケーションにおける記号送受信の状況把握であり、Hall（1976）はコンテキストを文化の共有情報量により「ハイコンテキスト」と「ローコンテキスト」に区分した。次の図はHallが示したものであるが、ローコンテキスト文化の場合、共有する情報量が少ない中でのコミュニケーションであるため言語による表現が不可欠となってくる。ローコンテキスト文化として考えられるのは欧米などである。それに比べて、アジアの国々（日本、中国など）はハイコンテキスト文化と考えられている。



〔図2〕 ハイコンテキストとローコンテキスト：Hall, E.T. (1976) <sup>5</sup>

### (2) 日本文化について

一般的な日本人社会はHC（ハイコンテキスト）文化と考えられる。服部（1997）の記述にもあるように、

## 発話行為が他者にもたらす影響に関する研究

「不言実行」、「沈黙は金…」、「男はだまって…」といった格言や諺は必ずしも日本固有のものでないにしても日本人の考え方をよく表している。日本では一般的に「沈黙の美德」とでも呼べるような倫理観が定着している。〔中略〕言葉を尽くした自己表現や、それを前提にしたコミュニケーションは不必要、場合によっては排除されるべきものという考え方がある。<sup>6</sup>

日本人同士のコミュニケーションには「沈黙」が重要なものとされている。黙っていてもそれが日本人のコミュニケーションには必要なものであり、ローコンテスト文化のようにインフォメーションしなければ伝わらない文化ではない。また、日本人のコミュニケーションに関して芳賀(1979)は欧米人との差異を次のように述べている。

日本人のコミュニケーションに対する態度の根本は、「語らぬ」ことであり、自己の立場を「わからせ、通す」ことではない。〔中略〕欧米人のように相手を何時間でもつかまえて「わからせずにはおかぬ」と闘志をむき出しにするようなことは少ない。〔中略〕日本人のコミュニケーションの最大の特徴は、伝える意志がないまま伝わる、ということである。<sup>7</sup>

日本人の文化は「察しの文化」ともいわれるように、「沈黙」を続けたままで相手が「察し」てくれることが全ての前提となる。対人コミュニケーションにおいては、「思いやり」「気配り」「気遣い」「心遣い」や「以心伝心」という言葉がその最たるものとして扱われていることから分かるように、心身の心の部分が強調されている言葉が多く、口頭表現面では敬意表現（敬語）などが日本人の人間関係を表す言語なのである。<sup>8</sup> 古田（1990）は日本的集団主義と和の精神について、

日本には、人間を超越する絶対者の神がないのであるから、日本人のイデオロギーを決定するのは、お互い同士だということにもなる。この考えは、日本人論で論じられる。「間柄＝間人主義」に通じるものがある。<sup>9</sup>

と述べ、和を重視する民族でもあり、HC（ハイコンテスト）文化の民族と考えられる。

### （3）日本のビジネス社会（HC&LC文化）

コンテストを林（1994）は「意味環境」<sup>10</sup>と述べ、日本はHC（ハイコンテスト）文化であるがビジネス社会にはLC（ローコンテスト）文化も存在すると述べている。更に林（1994）は文化によるコミュニケーションの違いを次のようにまとめている（「高コンテスト」がハイコンテスト、「低コンテスト」がローコンテストである）。

低コンテスト	高コンテスト
<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語への依存度大</li> <li>・貴方が言うことは貴方が意味すること</li> <li>・非言語表現（ノンバーバル）への依存度小</li> <li>・情報はその大部分が、書かれるにせよ、口頭にせよ、特定言語によって伝達される</li> <li>・異文化コミュニケーションで意味を十分斟酌しない（underscanning）</li> <li>・ホンネ、正直さ、内容を重んじる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語への依存度小</li> <li>・貴方の言葉に10通りの意味がある</li> <li>・非言語表現（ノンバーバル）への依存度が大</li> <li>・情報は、特定言語によるよりも、より多く物理的状況や内部の知識によってその意味が導き出される</li> <li>・異文化コミュニケーションで意味を斟酌し過ぎる（overscanning）</li> <li>・タテマエ、和、形を重んじる</li> </ul>

〔表1〕 文化とコミュニケーション：林（1994）<sup>11</sup>

また、長野（2000）は、

日本人は、きっぱりと「ノーと言えぬ」やさしき日本人なのである。〔中略〕日本人の生活において「暗黙の了解」というものが大きな役割を果たしているために、多くを語る必要がなく、同時に「他人への配慮」によって、イエスやノーを強調することもない。<sup>12</sup>

日本人は和に重きを置くため欧米人のように自らの意見を主張することは避け相手が納得するまで徹底的に向き合って話し合うという場面を設定することは少ないのだが、実際のビジネス場面ではローコンテクスト文化も存在するようである。自らの意見を主張することも必要ではあるが、拙稿（2006）でも述べたように、日本の場合は事前に「根回し」などの行為を行い、日常生活において相手の話に納得できない時にも鋭い手法の切り返しをせずに婉曲な表現を用いて、自らを低めながら自己を主張しなければならない。ハイコンテクストとローコンテクストの境目部分におけるスキル修得が必要となるのだが、社会へ出る前の学生がどのような場面でローコンテクストを体験できるのかということが問題になってくる。言語への依存度が高く、情報は特定言語によって意味がなされ、より多くの物理的状況や内部の知識によってその意味が導き出されないような状況をつくるのが急務になってくる。社会人ではない学生が全く知らない他者へ話しかける場面を設定することが必要なのである。他者への話しかけには発話行為の語用論が多なる影響を及ぼすため、次章では発話の持つ重要性と発話行為表現ならびに指導過程について述べる。

### 3. 語用論の導入

#### (1) 第一義的発話行為

知らない他者へ話しかける場面では、発話することにより他者へどのような意味合いをもたらすか、影響を与えるか、ということがその後の会話を継続する鍵となる。第一義的発話行為についてはVanderveken, D. (1998)が、語用論において日常会話での話し手の意味は文章で書き表した時の意味と同等でないことを示している。例えば、“Can you pass the salt?”と尋ねることで話し手が間接的に塩を回してくれるように聞き手に頼むことは、その発話の第一義的発話行為は間接的な要請であり聞き手の能力についての字義通りの質問ではないとしており、第一義的発話行為の大切さを強調し質の公準と量の公準を定め、次のように述べている。

Given their logical forms, certain speech acts are stronger than others, in the sense that they have more conditions of success, of non defective perfective performance or of satisfaction.<sup>13</sup>

ローコンテクストにおいて発話する際には、発話の受け手にこちらの意図するものを瞬時に汲み取るように促すスキルが必要となってくるのである。以上のようなことに基づき、学生がスキルを身につけるための前段階として第一義的発話表現作成のプロセスを次章で述べる。

#### (2) 第一義的発話行為の指導過程

一般的に他者へ依頼する場合はそれまでに築いてきた人間関係の影響が往々にあるので、見知らぬ他者への依頼の場合は第一声の発話表現が重要になってくるため、単に話しかけるだけではなく見知らぬ

## 発話行為が他者にもたらす影響に関する研究

他者への依頼表現を考えることがスキル上達的手段と推察する。

場面設定として見知らぬ他者への依頼表現（道順を聞く）という状況を想定した上で、先述の第一義的発話行為の大切さや日本人同士の人間関係を助ける敬意表現（敬語）を使用することも促しながら依頼文を考えさせた。学生が回答したいくつかの依頼文は次のようなものであった。

- ①「ちょっといいですか。道順を教えてください。」
- ②「こんにちは。道順を教えてください。」
- ③「すみませんが、道順を教えてください。」
- ④「誠に申し訳ございませんが、道順を教えてください。」
- ⑤「誠に申し訳ございませんが、道順を教えてくださいませんか。」

- ①の表現は第一義的発話行為の間接的な要請であり、英語ならば“Can you tell me the way to~?”  
でよいが、日本語の依頼表現では異なる。
- ②の表現は学生らしさが出ているものの依頼の部分は「教えてください」だけである。
- ③の表現は日本的な表現（「すみません」という相手の気持ちを和らげる表現）が挿入されているので適切である。
- ④・⑤の表現は日本的な表現（「誠に申し訳ございません」という相手の気持ちを和らげる表現）の中で最もへりくだった表現が挿入されているので更に良い。そして、④の表現「～道順を教えてください」という肯定文よりも⑤の表現「～道順を教えてくださいませんか」という疑問文のほうが、相手に選択権を委ねているので更に適切な表現である。

罫線枠内の答えを導き出すように、国語表現で教えた敬意表現の復習も兼ねて指導する。

#### 4. スキル修得の方法

##### (1) 実施の背景

コミュニケーションにおけるローコンテキストを踏まえてのスキル修得なので、全く見知らぬ他者へのコミュニケーションと考えると学内での場面設定では難しくなる。そのため学外での課外学習となるが学生数やカリキュラムに縛りがあるため、ゼミ生（1・2年生）を対象に課外ゼミナール形式で学習させることにした。見知らぬ他者への発話場面を想定したものには数種類あるが、仮に道順や場所を尋ねるのでは結果として残るものや自らのスキルをフィードバックするものが少ないため、街頭アンケート調査を行なうことにした。2年生は卒業研究レポートに役立つアンケート項目を、1年生はコミュニケーションに関するアンケート項目をそれぞれ考えてマッチングさせた。実施状況は次のように決定してゼミ生に周知した。

- 【 目 標 】 ローコンテキストにおけるコミュニケーションスキル向上
- 【 日 時 】 平成19年7月20日（金） 午後3時～5時30分
- 【 場 所 】 三重県津市の津駅東口周辺

- 【 対象学生 】ゼミ生 (17名) = 全員が「言葉とコミュニケーション」受講済み  
日本人女子学生 (16名)、留学生男子学生 (1名)
- 【 共通理解 】・調査可能箇所は公共の場のみ (駅側との取り決めを守ること)  
・一人当たり最低10部はとること

## (2) 事前練習 (留意点)

事前練習として場面設定をした上でのバーバル (言語表現)、ノンバーバル (非言語表現) を用いての疑似体験をする。発話表現は、前述 (P.155) の⑤の「誠に申し訳ございませんが、道順を教えてくださいませんか。」という表現の「～道順を教えてください～」を「～アンケート調査にお答え～」に置き換え「誠に申し訳ございませんが、アンケート調査にお答えいただけませんか。」という発問をする。自らの名乗りも忘れないようにして簡単な自己紹介 (所属と名前) と目的も加えた依頼表現も加え時間を計る。歩行している人間を呼び止めて依頼表現を用いるため、歩数と時間、立ち止まってもらうまでのタイミングが非常に重要である。歩幅の個人差があるので、ゼミ生が実際に歩いて他者が話しかける程度の歩数を割り出した。歩数7歩までが限界であった。歩数7歩以上くつついて話しかけられると「不快を感じる」とのことであった。多少の個人差はあるが、歩数7歩に対して4～5秒かかる。発話してから言い終えるまでの所要時間を計ると下記ようになる。

依頼表現①【10秒】「お忙しいところ誠に申し訳ございません。高田短期大学の者ですがコミュニケーションに関するアンケート調査にお答えいただけませんか？」

依頼表現②【8秒】「申し訳ございません。高田短期大学の者ですがコミュニケーションに関するアンケート調査にお答えいただけませんか？」

依頼表現③【7秒】「すみません、高田短期大学の者ですがコミュニケーションに関するアンケート調査にお答えいただけませんか？」

依頼表現④【5秒】「すみません、コミュニケーションに関するアンケート調査にお答えいただけませんか？」

依頼表現⑤【4秒】「すみません、アンケート調査にお答えいただけませんか？」

依頼表現①は最も高い敬意表現を用いたものであるが、言い終えるまでの所要時間は10秒もかかるため長すぎる。②・③は相手の気持ちを和らげる表現を少し軽めのものにしたが、やはり8秒や7秒では長い。依頼表現④や⑤は自らの所属を明確にしていなかったため時間としてはマッチしているが適さない。そこで、所属を短縮してアンケート内容を省略すると依頼表現⑥・⑦のようになる。

依頼表現⑥【5秒】「すみません、高田短大の者ですがアンケート調査にお答えいただけませんか？」

依頼表現⑦【4秒】「すみません、高田短大の者ですがアンケート調査にお答えいただけますか？」

依頼表現⑥・⑦のどちらかの表現を用いて発話することに決定して、通行人役と依頼学生役に分かれて事前練習を行なわせた。非言語表現 (ノンバーバル) の視線、表情、パラ言語、身振りにも注意して、通行人の歩く速度にも合わせながら練習する。

## 発話行為が他者にもたらす影響に関する研究

## (3) 結果

学年と集計者	集計結果	成功に繋がる要因	失敗に繋がる要因
1-a	16	バスを待っている人に頼んだこと	バスが停車してからの時間帯
1-b	8	誰かを待っていそうな人に頼んだこと	改札口を目指して歩いている人
1-c	7	バス乗り場に並んでいる人に頼んだこと	アンケート用紙が2枚あったこと
1-d	6	3～4人でゆっくり歩いている人達	足早に駅に向かって歩いている人
1-e	7	ペアで頼むと相手側に安心感を与えた為	用紙だけの質問（口頭質問にすべき）
1-f	7	自販機横の長椅子に座る人に頼むこと	歩行中に話しかけること
1-g	7	駅前から離れた所で頼んだこと	急いで駅に向かって歩いている人
1-h	6	おとなしそうな年下に頼むこと	中年女性
1-i	5	男性よりも女性に頼んだこと	外国人であったため言葉の壁があり失敗した
2-j	10	バス乗り場付近の人、年配の人に頼んだこと	同年代や3～4人のグループの人達
2-k	7	サラリーマン風の年配の人に頼んだこと	仕事帰りのOLへの依頼
2-l	7	「卒論」という言葉が効いた	アンケートの内容（不明だと不審がられる）
2-m	8	バス待ちの人が良かった	歩行中の人
2-n	8	声かけに慣れると上手くいくようになる	最初、はっきり頼めなかったこと
2-o	5	「卒論のアンケート」という言葉が効いた	「～いいですか？」と尋ねる表現をしたこと
2-p	9	時間に余裕のありそうな人に頼んだこと	最初はなかなか話しかけられなかったこと
2-q	7	ペアを組んで行動したこと	ペアを組んだ友人と無駄話をしてしまったこと

当日の結果をまとめた表である。a～iが1年生（9名）、j～qが2年生（8名）である。所定区域内で2時間30分以内にアンケート依頼をするという条件で、各自10部のノルマーを課した。駅前という限られた範囲だが、成功要因と失敗要因を照らし合わせると「場所」「時間」「人物像」「状況」の具体的な事柄が浮かび上がってくる。

「場所」に関しては、駅前という場面にも様々な状況が混在することを認識できた。改札口から離れた所やバス停付近の回等率が高かった。「時間」に関しては、夕刻の仕事帰りの時間帯は難しく、バスが停車してからの時間帯も厳しいことが分かった。回答する「人物像」も、歩行中の他者に話しかけることは非常に困難であることを実際に確認することができた。一人で足早に駅に向かって歩いている人よりも3～4人でゆっくり歩いている人達、誰かを待っている人、バス乗り場に並んでバスを待っている人や自販機横の長椅子に座る人に頼むと回答率が高くなる。同年代には拒否される傾向が強く、サラリーマン風の年配の人やおとなしそうな年下（中・高生）に頼むと回答を得やすいようである。また、何のためのアンケートであるか明言することも不可欠であり、「卒論」という言葉は効くようである。「卒論のデータになるのならきちんと答えなければならない」という回答者もいたようだ。依頼側はペアを組んで頼むと回答者側に安心感を与え回答率も高くなったという体験談もあった。アンケート用紙が2枚あったことも障害となったため、用紙（文書質問）だけではなく口頭質問も各自の分担を決めて取り入れるという方法も今後は取り入れるべきであるという提案も出た。2年生は、キャリア教育のなかで第一印象についての講義を受けたことの振り返りにもなったと述べている。非言語表現（ノンバーバル）の大切さを講義で聴いていたものの、他者の非言語表現をみて改めて発話する以前の表現の重要度を学んだという。

最後に次の2つの結論を導き出すことができた。それは、「発話以前に相手の状況が察知できたこと」と「閉じた質問での依頼文では効果的でないこと」である。

## ①「発話以前に相手の状況が察知できたこと」

事前準備の時点では、「歩行中の見知らぬ他者に依頼する」という場面設定で時間を計りながら発話行為に取り組んでいたが、「すみません」という発話により相手の状況（ノンバーバルによるもの）が察知できたという結果が82%の割合（1年生は9名中7名、2年生は8名中7名）が得られた。発話することにより、非言語表現（ノンバーバル）で他者が反応を示す場合が多く、「手を用いて断わる（遮断する、申し訳なさそうに拝むポーズをとる）」行動や「全く無視する」行動に出る。言語表現（バーバル）で他者が反応を示す場合は、「ちょっと時間が無いので…」「すみません」という林（1994）が指摘していた「和、形を重んじる」発話が戻ってきた。

## ②「依頼文（閉じた質問）が効果的ではないこと」

こちらが準備した質問文についても新たな事実が確認できた。当初は、閉じた質問<sup>14</sup>形式の依頼文で事前練習をしていたが、見知らぬ他者への依頼の場合は「閉じた質問」ではインパクトが弱いため効果的ではないことが分かった。「開いた質問」では相手に負担をかけると予測していたが、「開いた質問」を用いた依頼文を作成する必要があるようである。

## おわりに

ハイコンテクスト文化といわれている日本社会であるが、昨今ではハイコンテクストとローコンテクストが混在しているため、今年度、初めてローコンテクストにおけるスキル修得を試みた。第一義的発話行為から事前準備に取り組んだが、当初、考案したものと結果には差異が生じた。

ローコンテクストを想定して場面設定をしていたが、Hall, E. T. (1976) のいうハイコンテクスト文化のとおり、日本人文化は非言語表現（ノンバーバル）への依存度が高く、言語への依存度は低いことが分かった。発話により相手の状況が特に非言語表現（ノンバーバル）によるもので察知できたという結果が82%であった。発話することにより、非言語表現（ノンバーバル）で他者が反応を示す場合が多くまた、物理的状況によってその意味が導き出され、当初、準備した質問文についても新たな事実が確認できた。見知らぬ他者への依頼の場合は「閉じた質問」ではインパクトが弱いため有効的ではないことも判明した。「開いた質問」の使用方法も考慮していきたい。

今後は、日本人の「コミュニケーション」研究のなかで日本社会での効果的なスキル修得や円滑な人間関係が保持できるものを何らかの数値測定等の手法を用いて体系づける所存である。

## 註

- 1 平成16年1月29日に厚生労働省は「若年層の就職能力に関する実態調査」で、「コミュニケーション能力、職業人意識、基礎学力、資格取得、ビジネスマナーの五つの能力を修得すれば、事務、営業系の仕事に採用される可能性が66.5%になる」とまとめている。厚生労働省では、この五つの職業能力を、比較的短期間の訓練で向上させることができる「若年者就職基礎能力」と定義している。この結果、採用可能性は、コミュニケーション能力を修得した者が18.0%、職業人意識も18.0%、基礎学力は12.2%、資格取得11.3%、ビジネスマナー7.0%で五つの基礎的能力を合計すると66.5%になる。

## 発話行為が他者にもたらす影響に関する研究

- 2 厚生労働省も「若年者就職基礎能力支援事業団 (YESプログラム=Youth Employability Support-Program)」の対象となる教育訓練の認定基準領域のひとつに「コミュニケーション能力」を若年者層が習得すべきスキルとして位置づけている。コミュニケーション能力」として「傾聴する姿勢、双方向の円滑なコミュニケーション、意見集約、情報伝達、意見の主張、相手の尊重、組織・人間関係、明確な説明、図表を用いた表現」としている。
- 3 平田祐子他 (2004) 『ワークで学ぶビジネスコミュニケーション・スキル』西文社 p. 6-11
- 4 長尾素子、田中典子 (2006) 「教育訓練期間における『コミュニケーション能力』の開発－企業研修を行う講師へのアンケート・インタビューから見えてくるもの－  
Sietar Japan第21回年次大会、麗譚大学…長尾、田中は「コミュニケーション能力」について上記の発表をしている。その中で、コミュニケーション能力を言語学分野、コミュニケーション学分野、社会学分野、医療分野、ビジネス分野からの詳しい発表であった。
- 5 Hall, E. T. “Beyond Culture” New York, Doubleday, 1976, 102p
- 6 服部裕「プレゼンテーションとディベートの方法に関する諸問題」(1997)  
秋田大学教育学部『秋田大学教育学部研究紀要』(人文科学・社会科学部門52) p. 90
- 7 芳賀綏 (1979) 『日本人の表現心理』中央公論社 p. 20-22
- 8 平田祐子「敬意表現指導上の留意点」『高田短期大学紀要』第25号 2006 p. 152  
中世(室町末期)に來日した宣教師達が異文化の言語である日本語との遭遇により「日本人の敬意表現」の細やかさに気づき、それらの体系付けを余儀なくされた。生まれた時から母語として敬語を使用してきた日本人は気付かなかったが、異国人にとっては日本語の複雑な人間関係を表す「敬語」という言語体系の存在を知り、敬意が含まれた表現は日本語の習得に欠かせないものとして分析したのであった。
- 9 古田暁監修 (1990) 『異文化コミュニケーション・キーワード』有斐閣 p. 117
- 10 林吉郎 (1994) 『異文化インターフェイス経営』日本経済新聞社 p. 68
- 11 前掲書 p. 72
- 12 長野真理子 (2000) 「日本のコミュニケーションをとおしての自文化理解」  
日本秘書教育学会『研究集録』第6号 p. 28
- 13 Vanderveken, D. (久保進訳) (1998) 『発話行為理論の原理』松柏社 p. 98  
第一義的発話行為の質の公準と量の公準は「一定の発話行為は、より多くの成功条件、欠陥なき遂行条件、或いは充足条件を持つという意味で他の行為よりも強力である」と述べている。
- 14 平田祐子他 (2004) 『ワークで学ぶビジネスコミュニケーション・スキル』西文社 p. 64-68  
「開いた質問」よりも「閉じた質問」のほうが相手に与える負担が少ないため「お答えいただけませんか?」「お答えいただけますか?」という依頼文を考えていたが、今回のようなケースでは効果的ではなかった。

## 参考文献

- Bernstein, B. (1964) “Elaborated and Restricted Codes : Their Social Origins and Some Consequences”.  
The Ethnography of Communication, 66 (6) (Part 2), p. 55-69
- Dance, Frank. E. X. (1970) The ‘Concept’ of Communication : Journal of Communication 20, p. 201-210

- Dance, F. E. X. and Larson, C. E. (1976) "The Functions of Human Communication" : Theoretical Approach.  
New York: Holt, Rinehart & Winston. p. 171-192
- Garry P. F. (1990) "The Cultural Dimension of International Business" Prentice-Hall,
- Hall, E. T. (1976) "Beyond Culture" New York, Doubleday
- Vanderveken, D. (久保進訳) 『発話行為理論の原理』 松柏社 1998
- 風戸修子 (1996) 「コミュニケーション能力開発に関する一考察—系統的学習の視点から—」 全国大学・短期大  
学実務協会 『実務教育年報』2 p. 31-44
- 田中ゆき子 (2000) 「日本の短期大学におけるコミュニケーション教育の実態調査」  
Speech Communication Education Vol. 13、日本コミュニケーション学会 p. 33-48
- 野村眞木夫 (2000) 『日本語のテキスト — 関係・効果・様相 — 』 ひつじ書房
- 芳賀綏 (1979) 『日本人の表現心理』 中央公論社
- 林吉郎 (1994) 『異文化インターフェイス経営』 東京 日本経済新聞社
- 三原健一、平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造 — ミニマリストプログラムとその応用 — 』 松柏社